

## 2012年度受託研究概要報告

# 既存建築物の改修によるシェアハウスの実現

## 研究メンバー

川北健雄	デザイン学部環境・建築デザイン学科教授
花田佳明	デザイン学部環境・建築デザイン学科教授
金子晋也	デザイン学部環境・建築デザイン学科助手
金野千恵	大学院芸術工学研究科助手

## 委託者

大和船舶土地株式会社

## 研究概要

平成22年度～23年度にかけての受託研究「個別更新を通じた住宅地の魅力づくりに関する研究」の成果を反映した、既存建築物の改修デザインと施工協力を行った。

数年間にまたがる一連の研究の対象地は、六甲山系の西端部に位置する高取山の山麓部に位置し、1960年代を中心に大規模な造成が行われた住宅地である。当時建てられた戸建住宅やアパートは老朽化が進行しているが、小さなスケールの建物が集合し、そこに道端の植栽や小規模な増改築等、住民がつくりだした多彩なまちの要素が加わることで、徐々に形成されてきた居住環境の良さを生かすため、大規模な再開発は行わずに個々の建物を順次更新し、新しい魅力をつけ加えて行こうというのが、一連の研究と関連プロジェクトを進めていく上での基本方針である。

そのような背景のもとで、今年度は木造2階建瓦屋根の賃貸集合住宅（関西を中心に「文化住宅」と呼びならわされてきた形式のアパート）の部分改修を行った。改修前は1階と2階に4戸ずつの住宅があったが、これらのうち空室となった1階の隣り合う3戸部分を、若者の入居を想定した、3つの個室と共用スペースの構成によるシェアハウスに組み替えた。

## 研究成果

設計は教員が中心となって行ったが、スタディ模型の制作や家具の検討には、大学院生や学部生も参加した。空間構成上の工夫としては、共用スペースを道路側にとり、その奥に3つの個室を並べることで、「道路」→「前庭（兼駐車場）」→「共用スペース」→「個室」という、パブリックからプライベートへの段階的な空間の変化を実現した。シェアハウスの中心となる共用スペースには、居住者と来訪者とが共に集うことができ、様々な作業の場としても用いることができる大きなテーブルを配置することにした。また、共用スペースの開口部の透明度を高めて、内外に適度な連続性が生まれるようにした。

施工の過程でも、既存の間仕切りや内装の解体作業、仕上げの塗装作業等に学生たちが参加し、大学のキャンパス内では得られない貴重な現場での学習機会を提供することができた。2013年1月末には竣工を迎え、いよいよ2月からは本学の学生3名が入居して生活を始めている。大きなテーブルは、ねらい通り多様な人々の交流の場として機能し、犬を連れて散歩する人たちも、外から見える楽しい雰囲気にかかれるのか、自然に近くに寄ってきて、気軽に若者たちと会話する風景が現れている。学生たちは今後、毎日の暮らしを通してどのようなことを発見し、このまちとどのように関わっていくのだろうか。シェアハウスという適度に開かれた住まい方を通して、この地域における人々のネットワークがどのように広がっていくのかについても、今後、記録をとりながら考察を行っていきたい。

